

戴 震 の 經 學

はじめに

「清朝考證學」の語が、今日一般にもたらす表象としては、文字の研究→言語の研究→古聖賢の心の把握、という方法乃至精神、を基調とする學、とされるであろう。この認識を今日に固める要因としては、學者たちの實踐並びに業績の在ることはもとよりながら、考證の學の巨匠、少くもその一人である戴震、字は東原、一七二三—一七七七の發言の數々がある。たとえばその一つ、余蕭客の『古經解詁沈』のために書いた序(『戴東原集』卷十)には、

古典研究のいたりつくところは道なのであるが、その道をあきらかにしているのは言語である。言語をかたちづくっているものは、文字のほかのなにもでもありえない。さればこそ、文字をてがかりに經の言語を知り、經の言語をてがかりにいにしへの聖賢のところに通ずる、という段階がふまれねばならぬ。(烏呼、經之至者道也、所以明道者、其詞也、所以成詞者、未有能外小學文字者也、由文字以通乎語言、由語言以通乎古聖賢之心志、譬之適堂壇之必循其階、而不可以躐等)

と。この主旨の發言は、彼が學問の上で道を同じくせぬことを意識し

近 藤 光 男

ている相手、是仲明、名は鏡なる人物に送ったがみ、「與是仲明書」(『戴東原集』卷九)にも、また彼が「同じ學問に志す間柄にあつては友人である」といつて、弟子の禮をとつて來たのを辭しはしているものの、まさにすぐれた弟子であつたはずの段玉裁、に與えたがみ(安徽叢書第六期『戴東原先生全集』卷首所載「遺墨」札第九)にも、内容は一層増幅されて、みえる。

ただ、この圖式は、少くとも戴震にあつては、現實にはこれと逆の方向をもつものであること、舊稿「屈原賦注について」(本誌第八集)その他において指摘して來た。清朝考證學の實態は、この事實を巨視的にみたところに認識しうるであろう。

またいわゆる清朝考證學とは何か、その概念規定を試みるとすれば、「經學、すなわち儒家古典の研究において、經の言語表現を重視しつつ、それに對して實證的な検討を加えるもの」としたい。語はみな、吉川幸次郎「錢謙益と清朝經學」(全集第十六卷)にもとづく。その「經の言語表現を重視しつつ」という處が、よほど注意されねばならない。それについてはまた吉川幸次郎「讀書の學」(「ちくま」一九七一年九月至七五年四月)が、語ることに詳かであるのに教えられる。

本稿も右二事を重大な關心事として持ちつつ、一つの個別の事實を

追つての、調査の結果を報告したいと思う。

「兩廣總督であつた阮元（一七六四—一八四九）が、江藩の『漢學師承記』のために序を書いたのは、嘉慶二十三年（一八一八）、桂林の旅さきであつたが、その序の中で阮元は、『大清經解』すなわち後の『皇清經解』となる書の編纂の構想を述べて、

私はつねづね、わが朝の學者たちの、經學研究の著述がはなはだ多く、また文集や隨筆にも探るべき經說があるので、なんとか細かに分類したうえ、それに整理を加え、諸經の經文のそれぞれの句のところにへもつて行つて、繋けておくようにしたい、と思つてゐる。といひ、その具體的な方法を示すために擧げる實例が二つある。

たとえば、休寧の戴氏が『尙書』の「光被四表」を「横被」と解されたが、それは堯典に繋げる。また寶應の劉氏が『論語』の「哀而不傷」の「傷」の字は、『詩』の「惟以不永傷」の「傷」であると解されたが、それは『論語』八佾篇に繋げ、また『詩』の周南にも互見するようにする。このようにして一つの書物を作り、『大清經解』という名をつけたのである。

いまの『皇清經解』は、阮元が雲貴總督に轉任して後も、てがみで指示を與えて成つたものであるが、ここに語られている構想によらず、叢刻のかたちをとる。それはいかなる經緯があつてのことか、いまの『皇清經解』に冠する夏修恕の序は語らない。それだけに『漢學師承記』序に阮元が書きとめた『大清經解』の構想は、貴重な記録といえよう。それはともかく、その構想を述べるに際して選ばれてゐる二つの擧例、その一つ、寶應の劉氏すなわち劉台拱の『論語駢枝』に

みえる説、については措く。ここには、休寧の戴氏すなわち戴震の、數多いすぐれた經說のうち、『尙書』堯典の「光被四表」を「横被」と解したというのを、阮元が擧例としてゐるのに著目して、その論證の方法そのものの分析、及びその反響を通じて、戴震の經學を考えてみたい。

二

戴震が『書』の堯典の「光被四表」の「光被」を「横被」と解した、といふその説は、いま『戴東原集』卷三の「王内翰鳳喈と與ふる書」にみえる。王内翰鳳喈とは王鳴盛（一七二二—一七九七）のこと、鳳喈はその字。この題下に「乙亥」と注記されている。乙亥とは乾隆二十年（一七五五）、戴震三十三歳で、段玉裁は「先生年譜」に「蓋し是の年、都に入る」とする年に當る。ただし戴震が初めて都に上つたのは、實はその前年、乾隆十九年であつたであらう。それは王鳴盛の妹婿である錢大昕の「自訂年譜」をもつとも有力な資料として推定できること、私の舊稿「清朝經師における科學意識」（本誌第四册）に言及がある。ところで王鳴盛は、乾隆十九年の會試に及第し、時に三十三歳、二十年には翰林院編修の官に在つた。王内翰とよぶのはそのためである。いまはまず、てがみの内容の検討を急ごう。

ただ、そのてがみはまた、王昶（一七二四—一八〇六）が『湖海文傳』卷四に「與王編修鳳喈書」として收めてゐる。王昶、字は蘭泉、王鳴盛・錢大昕ともにその若年の友、蘇州の紫陽書院に學び、院長として來た沈德潛が彼ら若い學生たちの詩を集めて『七子詩選』を刊行したことから、吳中七子の詩名がたつたいきさつについては、舊稿「錢大昕の文學」（東京支那學報第七第八號）において述べた。『湖海

文傳』七十五卷は、王昶が嘉慶八年（一八〇三）に『湖海詩傳』を選したあと、十年すなわちその没年の前年に、手ずから編んだもので、平生の師友及び門下生の散文作を収める。「嘉慶乙丑（十年）仲夏に識るす」とする凡例の一條に、「文傳の錄する所は、集有つて世に行はるる者、十の四五、其の或ひは集有れども未だ刊せられず、或ひは刊せらるるも未だ見ざるものは、則ち皆な平昔に寄寄せられし作を録す」とみえる。『戴東原集』に段玉裁が序を書いたのは、壬子すなわち乾隆五十七年（一七九二）六月であつて、戴震のばあいは「集有つて世に行はるる者」であつたはずである。ところが、ほかにその例はあるが、この「與王編修鳳階書」も、集に収めるものと掇べて文に異同がある。あるいは「平昔寄寄せられし」稿にもとづくか。

いまここでは、もとより『戴東原集』に収める文によるが、『湖海文傳』にみえる文との異同を適宜、記してゆく。はじめはこのてがみを書くに至るいきさつである。

承示書堯典注、逐條之下、辨正字體字音、悉準乎古、及論列故訓、先徵爾雅、乃後廣搜漢儒之說、功勳而益鉅、誠學古之津涉也、拜見させていただきます『尙書』堯典の注は、逐條のもとに、字體字音を明らかにするには、ことごとく古代のそれに準據され、また故訓を示すには、まず『爾雅』に徴し、そののちは漢儒の説を廣く集めておられ、お仕事は大變なだけに裨益は大きく、まことに古典研究者のためのてびきとなるご著書でした。

昨僕偶舉篇首光字、引爾雅光充也、僕以爲此解不可無辨、欲就一字見考古之難、則請終其說以明例、

ところで昨日、私はたまたま篇首の「光」の字は、『爾雅』の「光は充なり」を引いておられるのをとりあげたのですが、こ

の注解については説明がなくてはなるまいと考えます。そこで一字をとりあげて、古典研究のむつかしさをお目につけようと思ひますので、一つの明らかな例について試みる私の議論に、どうか、おしまいまでつきあつてください。

戴震と王鳴盛との交際は、どのようにして始まったのか、明確な資料を知らない。ただ、都へ上つたばかりの戴震が錢大昕を訪ね、錢大昕はその學問の精博さに歎じて、すぐ翌日、時に刑部侍郎であつた秦惠田に話すと、秦惠田はただちに錢大昕と同車して戴震を訪問し、都の名士たちへのひきまわしを買つて出て、これが急にその名が廣く知れわたる契機であつたことは、さきにふれた錢氏自訂年譜の乾隆十九年にみえる。錢大昕は會試に及第し、翰林院庶吉士となつた年である。

そして王鳴盛は、その妹がすでに錢大昕に嫁していたというだけでなく、この乙亥の年には、錢大昕と居を同じくしていたことは注目されてよい。『潛研堂詩集』卷四に、「寓を珠曹街に移し、禮堂と夜話す」と題する七絶五首がみえ、第一首に附された自注によれば、それは都に上つて以來、七たびめの移居で、乙亥の年六月のこと。禮堂とは王鳴盛の別の字である。その第三首には、

刻燭論心水乳投 燭を刻み心を論ず 水乳の投

廿年親申意綢繆 廿年の親申 意は綢繆

前身兄弟機雲侶 前身は兄弟 機雲の侶

仍占東西屋兩頭 仍ほ東西の 屋の兩頭を占む

「むかし晉の陸機・陸雲の兄弟は都へ上つて文學の名が並びつたが、かの兄弟がわたしたちの前身なのかもしれない。今日も仲よく都で一つ家の向いあわせの軒に住まっている」と。

さて、このてがみによれば、戴震に會つた王鳴盛が、その著作の一

部としてであろう、『尙書』堯典の注を示したという、それは何物なのか。王鳴盛には『尙書後案』三十卷後辨一卷の著が、乾隆四十五年の家刻本のほか、『皇清經解』に收める本がみられる。その自序によれば、乙丑すなわち乾隆十年（一七四五）二十四歳にして書き始め、乾隆四十四年己亥五十八歳で完成したという。戴氏に示した堯典の注といえ、やはりこの本の少くとも祖型をなすものであった、と思える。ところがいま『尙書後案』を披いて、堯典「光被四表格于上下」の條に至り、その解は、ここに戴震の言うごとくでは、まったくないのに驚く。この問題については後にたちもどることとして、いまはいよいよ戴氏の經說を聽こう。

孔傳光充也、陸德明釋文無音切、孔冲遠正義曰、光充釋言文、據郭本爾雅、桃頰充也、注曰、皆充盛也、釋文曰、桃孫作光、古黃反、用是言之、光之爲充、爾雅具其義、

孔安國の傳に「光は充（みつ）なり」。陸德明の釋文には音義を示しません。孔穎達の正義に「光は充なりとは、釋言の文である」とあります。郭本『爾雅』によれば、「桃・頰は充なり」、その注に「みな充盛なるなり」、その釋文に「桃の字を孫炎は光に作る。古黃の反」とあります。してみると、「光」を「充」とよむのは、『爾雅』にその訓詁が示されているわけです。

堯典の「光被四表」の偽孔傳に「光は充なり」とあるのは、『爾雅』釋言の訓詁に他ならないことを、まず指摘する。

漢唐諸儒、凡於字義出爾雅者、則信守之篤、然如光字、雖不解、靡不曉者、解之爲充、轉致學者疑、蔡仲默書集傳、光顯也、似比近可通、古說必遠舉光充之解何歟、雖孔傳出魏晉閒人手、以僕觀此字據依爾雅、又密合古人屬詞之法、非魏晉閒人所能、必襲取師

師相傳舊解、見其奇古有據、遂不敢易爾、

漢唐の學者たちは、およそ『爾雅』にもとづく訓詁に對しては、あつく信じそれを守りました。しかし「光」の字などは、訓詁をほどこさなくても、意味のわからない人などいません。これにわざわざ「充なり」という訓詁をつけては、かえって學者の疑いを招くことにもなりかねません。また宋の蔡沈の『書集傳』に「光は顯なり」とあり、近代の訓で疏通できるかにみえます。ところで古說、すなわち孔傳が、わざわざ古代の「光は充なり」の解を擧げるのは、どうしてなのでしょう。孔傳は魏晉時代の人の手に出たものとはいえ、私の見るところでは、この訓詁は『爾雅』に依據しており、また古人の文章表現の法にびったり合っており、魏晉時代の人にできることではありません。きつと師から弟子へと幾代も傳えられて來た舊解に、人の目をひく古めかしさが感ぜられるのが氣にいつて、そのままにして變えなかつたのにちがひありません。

この部分、もしおおむねこのような讀みかたでよいとすれば、私がかつて二、三の論文で指摘している戴學の基本的な姿勢の一つが、ここにも認められることとなる。漢唐の學者たちは自明の訓詁をつけなかつた、というのがそれである。

およそ清朝一流の學者たちにあつては、研究成果の報告は、つねにその頂點をのみおさえて記し、その文章は極力むだを省き、讀者がみずからの努力で調べ考えればわかることは書かない。そういうことは時代全體の學問の水準がよほど高くて始めて可能なことであろうが、戴震の未完の著述『七經小記』の構想が、これによって理解できるとしては、朝日新聞社中國文明選『戴震集』解説で述べた。戴震

のばあい、かように彼が彼みずからの著述においてそれを意識し、實踐した跡が認められるのみならず、古人、すなわち古代のすぐれた學者たち、がそうであったと確信するのである。たとえば『周禮』考工記の臧氏に、鐘という樂器を構成する諸部分の寸法が詳しくみえながら、鉦間とよぶ部分については數値を示さない。戴震によれば、それは示されている他の部分の數値から、句股の法すなわちピタゴラスの定理によって算出できるから記されていない、とする。自明の理をくどくど書き示すことなどしない古人の作文の體例がここに見られる、というのである（近藤「戴震の考工記圖について」東方學第十一輯）。いまここで、漢唐の學者たちは自明の訓詁は示さない、というのも、そういうした背景を知ることによって理解できよう。それにしても、「光は充なり」が自明の訓詁といえるのであろうか。

戴震は十六、七歳の頃から『爾雅』に注目し、乾隆十四年二十七歳の時、『爾雅文字考』十卷を作ったという（段撰「年譜」）。『戴東原集』卷三にみられるその序に、「劉歆・班固、尙書古文經を論じて曰く」として、『漢書』藝文志にみえる「古文の讀は爾雅に應ず。古今の語を解して知る可し」を引き、古代にあっては婦人子供が耳に聞いてすぐわかったことが經にみえるばあい、えらい學者がかわるがわる講義してなお疑義を残すのは、時の経過が然らしめるのである、という。この「古今の語」において、「光は顯なり」は今の語であって『近』、「光は充なり」はいにしえの語であって『遠』なのではないか。いにしえの語もいにしえにあっては『近』、すなわち自明の訓詁なのであった。このように考えれば一應の理解に達する。ただ果してそれでよいかどうか。

この部分、全體に讀みにくいのは、戴震の表現になにかうらがある

からではないか。『湖海文傳』によれば、「轉致學者疑」のあと、「蔡仲默書集傳」のまえに、「訓詁之體、遠而近之、不幾廢近索遠」の四字がある。もしこれを、「訓詁」ということのありかたとして、それは古代の言語を近代の語におきかえるのであって、近代の訓で意味が通じるのを顧みず、わざわざ古代の訓をさがし求めることは、しないのが普通である」の意に讀んでよければ、これはこのあと、むしろ逆説である蔡沈の『書集傳』の「顯なり」の訓詁でよくはないのか、ということを言うまゝであつたとよめる。

この部分後半は、僞孔傳の訓詁が、それなりに『爾雅』の訓に一致する結果となつた次第を説く。「以僕觀」三字は『湖海文傳』にはない。しかしこれにつづく「此字據依爾雅」ということがこの部分の骨子であるから、この三字はあるほうがよいと思う。また「又密合古人屬詞之法」というのは、ここではまだ具體的になにを意味するか明らかでないが、それはあとに提示される説によっておのずから明らかになる。

ともあれ僞孔傳の作者はかえつて『爾雅』の故訓によつたこととなる。ところが、

後人不用爾雅及古注、殆笑爾雅迂遠、古注膠滯、如光之訓充、效類實繁、余獨以謂、病在後人不能徧觀盡識、輕疑前古、不知而作也、

後世の人は『爾雅』及び古注を用いず、『爾雅』など迂遠であり、古注ときては融通がきかぬ、光を充と訓ずるなど、このたぐいの訓が實に多い、とほとんど笑いものにします。しかし私の考えでは、むしろ後世の人がなまはんかな知識しかないくせに、輕がるしく古訓を疑い、「知らずして作る」ことをするとところに問

題があるのだと思います。

「不知而作」は『論語』述而にみえる語。同じ述而篇のはじめ「信而好古」が、清儒爲學の基本姿勢として尊ばれるに對して、これはもつとも慎まれることである。なお「如光之訓充」一句を、『湖海文傳』は「如光不直云顯、必曲云充」（「光」について、すなおに「顯なり」と訓読せず、わざわざまわりくどく「充なり」の訓を與えるなど）に作る。そのほうがより明確ではある。

ここで「後人」というのは誰を意識するのか。この段階では讀者にとつて意表をつくこととなろうが、後に述べる事情から、王鳴盛を意識しての發言である可能性もあると、私は考える。

戴氏の議論は、以下、後半いま一つの重要な部分に入る。

自有書契以來、科斗而篆籀、篆籀而徒隸、字畫僂仰、寔失本眞、爾雅柶字、六經不見、說文柶充也、孫愔唐韻、古曠反、

文字ができてよりのち、科斗から篆籀へ、篆籀から隸書へと、字體は變化するうちに、次第に本來の姿を失つて來ました。『爾雅』の「柶」の字は六經に見えませんが、『說文』に「柶は充なり」、孫愔の『唐韻』に「古曠の反」とあります。

議論の發端に字體の變遷をいうのは、郭本『爾雅』の「柶」の字が六經にみえないところに問題があるからであろう。しかし『說文』にも「柶は充なり」とみえることを擧げる。『唐韻』の反切は去聲を示す。なお『唐韻』は亡んだ韻書であるが、大徐本『說文』の反切をそれとしていう。

樂記、鐘聲鏗、鏗以立號、號以立橫、橫以立武、鄭康成注曰、橫充也、謂氣作充滿也、釋文曰、橫古曠反、孔子閒居篇、夫民之父母乎、必達於禮樂之原、以致五至、而行三無、以橫於天下、鄭注

曰、橫充也、疏家不知其義出爾雅、堯典古本、必有作橫被四表者、橫被廣被也、正如記所云、橫於天下、橫乎四海、是也、

『禮記』樂記に「鐘聲は鏗なり。鏗以て號を立て、號以て橫を立て、橫以て武を立つ」、鄭玄の注に「橫は充なり。氣の作りて充滿するなり」、釋文に「橫は古曠の反」。また孔子閒居篇には、「夫れ民の父母か。必ず禮樂の原に達し、以て五至を致して、三無を行ひ、以て天下に横つ」、鄭注に「橫は充なり」とあります。ところが疏家たちは、この訓詁が『爾雅』にもとづくことに氣がついておりません。堯典の古本には、きつと「橫被四表」に作るものがあつたにちがひありません。「橫被」とは「廣被」です。まさしく『禮記』にいう「橫於天下」「橫乎四海」がそれなのです。

『爾雅』『說文』ともに「柶は充なり」とありながら、六經に「柶」の字がみえない。しかし『禮記』鄭注に二か處、「橫は充なり」の訓詁がみえる。それこそ疏家は氣づかなかつたが、鄭玄は『爾雅』にもとづいたのちがひがない。つまり六經の中では「柶」に當る字として「橫」が用いられていたのである。そこで戴震は、『尙書』の「光被四表」も「橫被四表」と書かれた本があつたにちがひないという推論を立てる。推論ではあるが、「證無くんば言はず」の世界に在つては、大膽な豫測の公言である。かくて、議論のさらなる發展として、「橫被四表」ならば、さきの孔子閒居の「橫於天下」、またここに始めて示されるのであるが、祭儀の「橫乎四海」、みな同じであることに氣づくであろう、というのである。祭儀のこの句に鄭注はない。

ただ、さきに「光」を「充」と訓ずることは漢唐の諸儒においては自明の訓詁であつた、と戴氏は言うごとくに讀めた。それならば『禮記』の鄭注にみえる「橫は充なり」もそうではないのか。この疑問

は私にはついに解けない。

ところで『湖海文傳』にみえる異文は、「不知其義出爾雅」の下に「古字蓋橫桃通、六經中用橫不用桃」の二句があること、これはあるほうが説明として親切であると思える程度のことであるが、「横乎四海是也」に次いで、「後漢書馮異傳、永初六年安帝詔、有橫被四表、昭假上下之語、班孟堅西都賦、橫被六合、其宜有所自矣」の四十字がある。これがなければ、戴震は議論の發端から積み重ねて來た論理の歸結として、必ず「橫被四表」と書いた本があったにちがいないという推定を下したままに終るのに對して、この四十字があるということは、『後漢書』と『文選』とに、いずれも「橫被四表」となっている堯典の文を典據として用いたと思える詔勅なり賦なりのあることを擧げて、自らその推論を裏付けていることとなる。それならばこれは有るに如くはない、しかし、『戴東原集』でこのてがみには本文のあとに戴氏みずからの附記があつて、この『漢書』のことは錢大昕に、「西都賦」のことは姚鼐に、それぞれ教えられたといっていること、あとに譯出するとおりである。従つて『湖海文傳』所收の文は後に整理を加えたもので、それらの教示をえた資料をここに入れて推論の歸結の裏付けとしたとみるのが自然であらう。ところが『湖海文傳』においても、あとに『戴東原集』のばあいと同文の附記がみえるのである。理解に苦しむこの事實を、ここにはただ擧げるにとどめよう。

横四表格上下對舉、溥徧所及曰横、貫通所至曰格、四表言被、以德加民物言也、上下言于、以德及天地言也、集傳曰、被四表格上下、殆失古文屬詞意歟、

「横四表」(四表に横つ)と「格上下」(上下に格る)と、對學してあります。あまねくゆきわたるのが「横」、つらぬいて到達する

のが「格」です。四表について「被」というのは、徳が民と萬物に加わることであらわし、上下について「于」というのは、徳が天と地に及ぶことをあらわすのです。『集傳』に「被四表」(四表に被り)と「格上下」(上下に格る)とにしているのは、古人の文章表現の法にかなわぬものかと思ひます。

すでに戴震は、「横被四表」は「横於天下」「横乎四海」というのと、なんら相違はないとした。つまり「於」「乎」また「于」などの虚字に相當するものとして「被」を讀むのである。それらを省いて殘る「横四表」「格上下」に、堯典の筆者の眞意を讀みとるのである。よつて蔡沈が「光は顯なり」と、「光」を副詞に讀むことは、「被」を「上下」のばあいの「格」に當る動詞とするわけで、「對學」におけるかたちをくずす、すなわち古人の文章構成のありかたにそむく讀みかたとなる。それに對して偽孔傳が、「光は充なり」と「光」を動詞に讀んだのは、「密に古人屬辭の法に合す」るわけである。

横轉寫爲桃、脱誤爲光、追原古初、當讀古曠反、庶合充鞮廣遠之義、而釋文於堯典無音切、於爾雅乃古黃反、殊少精覈、

「横」が轉寫されるうちに「桃」となり、誤脱によつて「光」となったもので、いにしへの當初までさかのばれば、「古曠の反」の「横」であつたのであり、充ちひろがり廣くゆきわたるの意に合うと考へられましよう。ところで『釋文』は、堯典に音義をつけず、『爾雅』に對しては「古黃の反」とするのは、はなはだ精確さを缺くことです。

この「横」↓「桃」↓「光」と、誤寫の過程を考える點は、のちに王引之が、轉寫の譌脱ではなく、古代にあってはみな同音で通用した文字であることを、精密に論證し修正する。『經典釋文』については、

音義を堯典につけず『爾雅』につけたことと、つけた反切が平聲になつてゐることを「殊に精覈を少く」といつたのであろう。

以下はてがみとしての結びのことば。

述古之難、如此類者、遽敷之不能終其物、六書廢棄、經學荒繆、二千年以至今、足下思奮乎二千年之後、好古洞其原、諒不置市古爲也、僕情僻識狹、以謂信古而愚、愈於不知而作、但宜推求、勿爲株守、例以光之一字、疑古者在茲、信古者亦在茲、漫設繁言以獻、震再拜、

古典研究のむつかしさとして、こうしたたぐいの例は、とてもにわかには擧げ盡くせるものではありません。六書がすたれ、經學がすさんで、二千年になります。あなたはこの二千年の後に奮起して、古えを好みその源をつきとめようとなさいます。それはまことに、ただ古えのことならなんでもとびつくというだけで、なさつておいでとはお見うけいたしません。私は性格はかたより知識はせまいのですが、古えを信じて愚なるは、知らずして作るよりはましであると考えます。とはいえ、やはり理論的な追及は必要です。守株する態度はやめましょう。「光」の一字を例といたしましたが、古えを疑うことも、古えを信ずることも、ともにこのてがみの中で申し上げることができたつもりです。勝手なことなながながしたためてお送りする次第です。震再拜。

この部分には『湖海文傳』との異同がほとんどない。「株守」を「拘守」に作るのみ。「遽かに之を敷ふるも其の物を終ふる能はず」は戴氏の文にしばしばみる。例えば「轉語二十章序」に、また「爾雅注疏箋補序」に。典據はあるいは『易』序卦の「物は以て終に盡くす可からず」などによるか。「市古」の語は用例を知らない。

乙亥の年に書かれたというてがみは、ここでおわる。以下は附記である。論學の書簡はその控えを手もとに留めておいて、他日、自分の集を刻する時にそなえるであらうが、その控えの稿のあとに、その後の所見を戴氏みずから書きつけていたのであろうか。二年後の丁丑すなわち乾隆二十二年と、壬午すなわち二十七年との附記がみえる。

丁丑仲秋、錢太史曉徵、爲余舉一證曰、後漢書有橫被四表、昭假上下語、檢之馮異傳、永初六年安帝詔也、姚孝廉姬傳、又爲余舉班孟堅西都賦、橫被六合、

丁丑の年の八月に、太史の錢曉徵（大昕）が、一つの證據を擧げてくださった。『後漢書』のどこかに「橫被四表、昭假上下」という句があった、と。搜してみると馮異傳に引く永初六年の安帝の詔りであった。孝廉の姚姬傳（鼐）が、また班固の西都賦の「橫被六合」を擧げてくださった。

壬午孟冬、余族弟受堂、舉漢書王莽傳、昔唐堯橫被四表、尤顯確、又學王子淵聖主得賢臣頌、化溢四表、橫被無窮、

壬午の年の十月に、族弟の受堂が、『漢書』王莽傳の「昔唐堯橫被四表」を擧げた。これがとりわけ明確である。受堂はまた王褒の「聖主得賢臣頌」の「化溢四表、橫被無窮」を擧げた。

附記は右二條に分けてみた。當時、姚鼐とも交りのあった次第については舊稿（東方學十一輯）を参照。

『漢書』王莽傳は「上」で、王莽の上奏文である。これを「尤も顯確なり」とするのは、堯の德についていうものであるからであらう。班固の賦、王褒の頌、ともに『文選』にみえる。

なお『後漢書』の馮異傳の詔り「橫被四表、昭假上下」は、章懷太子の子の注に「昭は明なり、假は至なり。上下は天地。假音は格」とある。

するとこの兩句、『對學』するものならば、「横」は副詞、「被」が動詞となり、『尙書』もそのようによんでのことと思えるのであるが、戴氏は、これをただ推論の歸結の正しさを實證する資料として附するのであらう。

ここでも戴震の學問として私の注意をひくのは、戴氏がみずからの推論によって『尙書』の古本には「横被四表」となっていたものがあつたにちがいないとの歸結を述べておいてから、そのあとに附記として、錢大昕、姚鼐、族弟受堂らから、その證據といえる例證の數々を教えられたことを記す點である。私の舊稿「戴震の考工記圖について」が指摘するように、戴震は、考工記の記事に従つて古代の器物の復原を試み、圖を畫いて、「わたしの圖を執つて、これを群經および古人の遺器について較べてみるならば、必ずこれに一致することである」と記して、その著述の筆を擱き、「後に乾隆年間に獻上された江西出土の大鐘が、まさしく我が説にぴったり合うものであった」と、よるこびのことばを残す。いまここに、彼の經學において、それと符節を合する態度をみたといえよう。

三

段玉裁が經韻樓に刻した『戴東原集』では、卷三は「爾雅文字考序」に始め、「爾雅注疏箋補序」、そしてこのてがみ「與王內翰鳳喙書」をおく。段玉裁によれば、彼が家事に迫われ友人に囑したため「編次は體を失し、字畫譌誤し、未だ善本と稱さず」（「先生年譜」）とのことであるが、いまこの編次は明らかに「與王內翰鳳喙書」を『爾雅』研究の論文とみての處理である。孔繼涵が微波樹に刻した『戴氏遺書』本の『戴東原集』では、序は序を集めた卷五に、書は書を集めた卷八に

みえる。従つて經韻樓刻本の編次には、このてがみの重點を見ぬいた見識がみられる。

それにしても、このてがみの發端のところは、どう讀んでも、王鳴盛が戴氏に見せた堯典の注が、先づ『爾雅』に古訓を徵し、その後廣く漢儒の説を捜求している點をほめておしよめない。そして「昨僕偶たま篇首の光の字に、爾雅の光は充なりを引くを擧ぐ」あたりからわかりにくくなり、「僕以爲く此の解辨無かる可らず」に至つては、あたかも『爾雅』の「光は充なり」を引くがまずいといふかに讀まれかねない表現である。

ここに一層、不思議なことがある。戴震の草稿が残つていたといふことで、『聚學軒叢書』に刊入された『尙書義考』が、ここで戴氏が、王鳴盛の示した「堯典の注」として言う體裁に、そっくりなのである。「光被四表 格于上下」の經文を掲げたところは、その下に雙行の注をつけて「光當從古本作横、爾雅說文竝作桃」といい、次行は經文から一字下げて「爾雅桃充也、格至也」とし、その下の雙行の注には孔傳をそのまま引く。次いでやはり經文から一字下げて「孔氏穎達曰外界之畔爲表」と記している。

またそのあと、『爾雅』等を引くよりさらに二字下げて「案」として記すのが、それは當然、豫想されることながら、この王鳴盛に與えたというてがみに見える説である。ただそれは、極めて整然としている。すなわち、まず『漢書』王莽傳、『後漢書』馮異傳、班固の西都賦、王褒の「聖主得賢臣頌」、みな「横被」とする資料を擧げ、『爾雅』並にその釋文、『說文』の「光は充なり」を記したあと、「蓋し古字桃と横と通用し、遂に訛して光と爲る」といい、次いで『禮記』鄭注の「横は充なり」から、僞孔傳の「光は充なり」は「應に是れ漢人の

舊き解經の文義を襲ふなるべし」という。てがみでは「雖孔傳出魏晉
間人手」から「遂不敢易耳」に至る實に五十四字を費した文が、ほと
んどこの一句に表現し盡されている。こうして、鄭玄も、また偽孔も、
「横四表」「格上下」と對擧するものと讀んだのである、との歸結を
うるのであるが、このあと、

詩の周頌の噫嘻の篇の鄭箋に「光被四表、格于上下」の二語を擧
げ、疏に注を引いて云ふ、「言ふところは、堯の徳光耀して四海の
外に及び、天地に至る、となり。所謂る大人は天地と其の徳を合
し、日月と其の明を齊しうするなり」と。此の所謂る注とは、或
ひは馬・鄭・王の注ならん。然れども光を以て光耀となせば、則
ち漢の時相傳の本、亦た自ら一ならざりき。

というのは、てがみではまったく觸れなかつた資料である。相手は鄭
玄である可能性が多分に強いのであつて、戴氏にとつては鄭學に對す
る態度の決定を、少くともこの場合の去就を、迫られる。それを「漢
の時にはそういう讀みかたも行われていたことがわかる」といった程
度に片づけて、つづけていふ、

蔡氏沈云ふ、光は顯なり、と。又た「被四表」「格上下」を以て
之を對言するは、古人屬辭の意を失せり。

と。蔡沈について「又」といふのは、これに竝ぶものとして先の鄭注
かもしれない光耀と解のあることを意識してであろう。つまり鄭
玄もまた、古人屬辭の意を失したのかもしれないことになる。

この案語になると、論旨はそれなりに明晰である。同じ經説を論ず
るにもてがみと著述ではちがいがあつたのは當然ながら、てがみも文集
というかたちの著述の中にあるものであり、「書」であつて「尺牘」
ではない。ここにまた戴學における著述の方法として、これまで私が

指摘して來ている類型が浮かび上る。すなわち、たとえば『孟子字義
疏證』と「原善」篇が、『續天文略』と「原象」篇が、いわば傳なり疏
なりと經との如き關係に作られている。そのいわゆる經との間に文章
の繁簡あまりにはげしい落差がとられ、いわゆる經は彙集の言語の極
地を示すかにみえる。従つて『孟子字義疏證』なり『續天文略』なり
をまず讀んで、その意に通じてはじめて、『原善』『原象』の結晶のみ
ごとさが理解でき鑑賞できるのである。

いまここでは、てがみと案語のことゆゑ、對比は右に擧げた例ほど
には浮き彫りになっていないかもしれない。ことに私のいわゆる經に
當る案語の方が、かえつて讀み易い。ただそれは先きにてがみの方
を、多くの疑問を残しながらも、吟味してのちに見ているということ
を、考慮に入れてよいであらう。

『尙書義考』は『戴氏遺書』に刊入されず、また段玉裁が「先生年
譜」のあとにその著書について解説する中にもその名を見ない。しか
し孔繼涵の従子、孔廣森が、みごとに駢文で残した「戴氏遺書序」に
は、この著書のために、はなはだ多くの文字を費やす。

君は以へらく、梅・姚は偽りを售り、孔・蔡は謬悠にして、妄り
に云ふ、壁下の書に航頭の字有り。古文一卷は祗だ西州に出で
しのみ。小序百篇、舊き名は北斗。正義・攝詁、黃序を経て僅か
に存す。月采・豊刑、赤眉に違ひて已に燼えたり。乃ち伊訓を誤
り撥きては、元年正月の疑ひを滋くし、周官を強ちに執りては、
五服一朝の解を推す。之を譬ふれば、年を鄭市に争ふは、本と自
ら兩つながら非なり、瓜を驪山に議するは、良に一の是無し。是
を以て假託を翦除し、羣淆を折衷し、步驟五三、目錄四七、尙書
義考を爲れども、未だ成らず、堯典一卷を成す。

いま『尙書義考』は二卷で、堯典、ただし舜典を分かつたぬ堯典、を盡くすのみ。これにほとんど一巻分に近い「義例」すなわち凡例を附す。孔廣森がここに「君はおもへらく」として述べるところが、戴氏のこの堯典の注や義例の中に直接見えるわけではなく、それは孔廣森から見ての戴氏の著述の目的乃至意義なのである。戴震は、ここに孔廣森が述べるような、『尙書』について「折衷」を要する學術史的な「羣淆」の數々を、その『經攷』（この書についての解説も私の舊稿にみえる）に明晰に整理している。『尙書義考』著作の意圖は、『爾雅』の故訓を以て一貫して『尙書』を解くことを試みようとするところに在る、と私は考える。

戴震がこの方法に確信をもつについて、さきに述べた「爾雅文字考序」にいうところの「劉歆班固、尙書古文經を論じて曰く、古文の讀は爾雅に應ず、古今の語を解して知る可し、と」というのが、無關係ではあるまい。いま『尙書義考』の義例の一條にいう、

爾雅は詩書を解釋す。漢儒經を釋くに、多く之を宗とすれば、則ち注内已に採録せ見る。詩に毛傳鄭箋有り、禮に鄭氏注有るが如きは、並びに宜しく其の文を全載し、然る後に附するに諸儒の説を以てすべし。惟だ尙書には漢儒の全注無し。今經文の下、即ち爾雅を取りて以て古義を存す。

と。こうなつてはいよいよ、王鳴盛が戴震に示したという堯典の注は、かえつてまるで戴氏の『尙書義考』のものではないか。

四

王鳴盛の考證割記に『蛾術編』八十二卷がある。名は『禮記』學記「蛾子時に之に術ふ」にとる。没後五十年、道光二十七年（一八四七）

丁未の年に、迄鶴壽、字は蘭宮、の校勘を経て刊刻が成つた。迄鶴壽の校勘は、文字の校正をのみ意味しない。到る處に案語を附して、王鳴盛の説を批判する。また彼みずから凡例を識す、その一條にいう、

近時攷據を譚る者、前には顧亭林を以てし、後には戴東原を以てし、兩先生を最と爲す。學に根柢有り、言は皆な確實なり。是の編は務めて必ず之を力斥す。斯れ乃ち文人相輕んずるの積習なり、今は節に従ふ。

と。しかし校勘に名を連ねる沈懋徳が、「惟ふに攷據の學は、言人人にして異なる。之を要するに是非謬らざるば、諸を後の論定に俟たん」といつて、そのような箇條も刪らなかつたおかげであらう、その卷四に「光被」と題する一條を見る。王鳴盛はいう。

新安の戴吉士震、號して經に精なりと爲す。乙亥の歲、予京師に官たり、尙書後案を作る。吉士偶たま予に過り、予が爲に堯典の「光被四表」の「光」は當に「横」に作るべきを論ず。予未だ敢て信ぜず。吉士没して其の文集出づ。内に予に與ふるの札有りて云ふ、

吉士とは、戴震を四庫全書の纂修に與らせるため、特別に翰林院庶吉士を賜つたのによる。ここで文集が出たというのは、曲阜の孔繼涵が微波樹に刻した『戴東原集』十卷をさす。そうとわかるのは、この文の末尾に近く「段玉裁戴集を重刊するも、仍ほこの文を存す」というからである。ここに奇怪なのは、「内有與予札云」と言つて以下に引く戴氏のがみの文章が、大概ねいま『湖海文傳』にみるものに近いことである。『戴東原集』では、微波樹刻十卷本に収める文も、經韵樓刻十二卷本に収める文とまったく異同はない。題下の注「乙亥」とのみ、が微波樹本は「乙亥秋」とあるのと、句末の語氣詞「歟」二

つが「與」になっているといった程度の差しかない。王鳴盛は果して實際に『戴東原集』を見ているのであろうか。

さらに王鳴盛の引くところは、『湖海文傳』との間にも二か處ばかり興味深い異文がある。その一つは始めのいきさつに係る部分、「昨讀所注今文尙書」と始まることは論外として、「震偶舉卷首一光字、語未畢而退、不可不終其說」に至っては、私がさきに、集の文の「則請終其說以明例」の「終」の意を、讀み誤ってはいなかったことを知る。いま一つは「堯典古本必有作橫被四表者」を言うまに、「古字蓋橫桃通、漢書黃道爲光道、則又古篆法黃兼光芟近似故也、六經中用橫不用桃」とみえる。この「光道」のこと、古文近似のこと、ともにここに初めて見る。

かくて王鳴盛はいう、

戴氏の集が出て、こんな書簡が收められているのを知って後、王莽の傳に「昔唐堯橫被四表」とあるので、驚いてその説に服したが、戴氏はかえってこの資料に氣づいていない。

と。かの附記も、もとより微波樹本以來ついでるので、これでは話はいよいよくちがって来る。話がくちがうだけでなく、ここで王鳴盛は攻撃に轉ずる。かの毛詩正義に引く鄭注（王鳴盛は鄭注と斷定している）に、光耀とする解があるのをそののち知り、戴氏の説は成り立たないものだから、『後案』に載せなかった、という。ここまでならば、あまり驚くことはない。しかし王氏は語をついで戴氏の人と爲りを「信心自是、眼空千古」といい、韓昌黎の所謂「世に仲尼無くんば、當に弟子の列に在るべからず」とうそぶくこそ彼である、とす。韓愈の語は「答呂鑿山人書」にみえる。そしてそのような彼にあっては鄭注など眼中にないであろうが、「予小子は、則ち鄭氏の家法

を守る者なり」と宣言し、「其の道吉士と固より大いに同じからず」という。そう聞けばもう「道同じからずんば相與に謀らず」と言いたいのだということも誰にも分かる。にもかかわらず敢て語を次いでそれをあからさまに言う。さきに戴震ががみに「但だ宜しく推求すべし、株守を爲す勿れ」といつていた意味がかえってこれで分かつてくるように思う。戴震の考えでは、

今の博雅にして文章を能くし、考覈を善くする者は、皆な未だ道を聞くことに志さず。徒らに先儒を株守して、之を信ずること篤し。南北朝の人の譏る所の、「寧ろ周孔の誤りを言ふも、鄭服の非を道ふ莫し」の如きも、亦た未だ道を聞くことに志さざる者なり。（答鄭丈用收書）

である。漢儒を超えて眞實を追求するのが、戴氏の學問であった。なお錢大昕は戴震家傳にこの語を收めて「南北朝人」を「唐人」と改める。しかしこの意をいう語は『舊唐書』元行沖傳『新唐書』元澹傳に元澹がその「釋疑」に引く晉の王劭の語にみえる。

王鳴盛の追求はなおつづく。戴震がかの光耀とする鄭注を知りながら隠したのではないかと。しかしそれよりもそのさきで意外な發言に出遇う。王鳴盛はいう、「三十餘年前、私は戴氏と交りをもったが、當時、拙著をとり出して戴氏の意見を求めたおぼえはなく、戴氏も私に手簡を投ぜられたことはないのに、いきなりその集に私に與えたてがみというものが載った。（三十餘年前、予與吉士往還、曾未出鄙著相質、吉士從未以札見投、突見于其集、）」と。

王鳴盛の言を信ずるならば、戴震の「與王内翰鳳喙書」はすべて戴震の虚構に成るもの、ということになる。とすれば、これは大變面白い事實である。いまこれを虚構として見なおせば、先に殘して來た疑

問のいくつかは、かえって解けることにもなる。

しかしまた一方、王鳴盛が、戴氏の集にこんなながみが載せられているのを見て驚いたとして引く、その文章が、文集所載の文と異なることは、どう理解したらよいのか。『湖海文傳』所收の文とも異るとして、先きに挙げた句、「震偶たま巻首の一の光の字を擧ぐるに、語未だ竟らずして退く。其の説を終えざる可らず」が、もつとも事態を語るに生彩ある表現のごとく感ぜられるのも不思議である。

従って王鳴盛が引く文こそ戴氏の墨跡に據つたのかもしいないといふ推測も、許される餘地は充分にあらう。この方向で考えてゆけば、『蛾術編』に引くところは實際に送られたてがみ、『湖海文傳』に引くところはその寫しが、洛陽紙價とまではいわずも、王昶の家にも入つたもの、『戴東原集』所收のものは、戴震が後日、手づから朱を入れて整えたもの、と一應の説明がつくであらう。

ただここに一つ言えることは、てがみ自體が虚設であるか否かはさておき、戴氏のがみの意圖は、たんに訓詁の問題で論争をしようとの次元にあるものではなく、それを通じて學問の方法を語りかけているにかかわらず、『蛾術編』はかたくなにそれを閉め出している、というのであらう。

しかし王鳴盛も、余蕭客の『古經解鈎沈』のために序を書いたときには、次のように言っている。

吾 天下の土と交り、經に通ずる者一人を得たり。吳郡の惠定宇、歙州の戴東原なり。問る東原と從容として語りぬ。子の學は定宇に于いて何如んと。東原曰く、同じからず。定宇は古へを求む、吾は是を求む、と。

戴震が「古經解鈎沈序」を書いたのは、乾隆三十四年であるが、これ

は惠棟が在世中のこのように讀めるところからすれば、乾隆二十三年以前、すなわち戴氏と面識を得て間もないころと思える。文は『西莊始存稿』卷十五（京都大學人文科學研究所藏本）にみえる。

五

戴震の經說としての「光被四表」の解は、『皇清經解』に二卷に摘録する『戴東原集』にもみえる。かの附記のあとに洪榜・段玉裁の案語をもに附するところから、經韻樓の刻本によつたものと分かる。

段玉裁はその著『古文尙書撰異』に「戴先生の王鳳喈内翰に與ふる書に曰く」として引くが、さきに疑念とした箇處のほとんどはその句が省かれて、說經の文として疏通し易いものになっている。それに續く按語に、伏生すなわち今文の「横」、壁中すなわち古文の「光」、ともに「爾雅」「說文」にみえる「枕」の字の通用または假借であることとをいい、かの周頌正義の鄭注「光耀」については、「此れ本義に就いて之を釋す」とする。そういう讀みかたも行われた、というのであらう。また「說文」「枕は充なり」に注しては、師說そのものを引きはしないが、やはり論これに及び、こちらでは光耀の釋を「蓋し非なり」といつている。

王引之が「光」「枕」「横」みな古代同音で通用したことを證して、轉寫の譌りとする戴說を正すことは先に述べた。『經義述聞』三十二卷本の「尙書上五十五條」の第一にみえる。王引之がはじめに「戴氏文集に曰く」としてかかげる文こそ、最も整然たる經說となつてゐる。そこでは「漢書」王褒傳、王莽傳、「後漢書」馮異傳を並べたうえ、「然則堯典古本必作横被四表」という。つまりかの附記にみえる資料を本文に移して本文を補完したかたちとなっている。そして

師説を補正した王引之が、この一條を結ぶことばは、

「光」と「格」と文を對にするに、而も鄭康成は「光」を訓じて「光耀」と爲すに至っては、義に於て疏と爲す。戴氏獨り「光は充なり」の訓を取る。其の識や卓なり矣。

である。いまここに一の光の字を以てして、いわゆる戴段二王の學の系譜をみることはなつた。

潛研堂家傳に「戴先生震傳」を撰した錢大昕は、傳のほとんど全文をその學説の紹介に當てるが、この「光被四表」の説を紹介するのは、資料を次のような構成に組み立てている。

嘗て謂へらく、儒者經を治むるに、宜しく爾雅自り始むべし。世に傳ふる所の郭注は、已に刪節せられて全からず。邢疏又た疏漏多し（以上「爾雅文字考序」、釋言の「枕は充なり」の如き、六經に枕の字無し。鄭樂記・孔子閒居に注する、皆な横を訓じて充と爲す。「横」「枕」は古へ通用す。書の「光被四表」は、漢書に引いて「横被」に作る。今孔傳は猶ほ光を訓じて充と爲す。文譌すれども而も義は殊らざるなり（以上「與王内翰鳳閣書」）。

さらにつづいて「爾雅注疏箋補序」から舉例が加えられるが、略す。構成、要約ともにもごとである。また錢大昕の『廿二史考異』卷十一馮異傳「横被四表昭假上下」の條下は彼みずからの文であるが、説はまさに戴説の根幹を定著させたものとみうけられる。

「横被」は即ち書の光被なり。漢書王莽傳、…、王褒傳、…、班固西都賦にも亦た云ふ、…、蓋し堯典「光被」の字は、漢儒傳授の本「横」に作れり矣。釋言に「枕・頰は充なり」と。「枕」は即ち「横」の字の古文なり。「光」を「茂」と爲す。「黄」と相似たり。故に「横」或ひは「枕」と爲る。孔傳は魏晉の間に出づ。

堯典「横」已に「光」に作り、而て「光」を訓じて「充」と爲すは、猶ほ古義を存す。後世因つて光耀の解を爲すは、漢儒の本旨を失せり。

戴氏の經説が、高郵王氏の學において補完修正されたかたちと、嘉定錢氏の學に集約されたかたちと、對比の妙がここに見られよう。

〔附記〕

その一、みづから語る研究法の圖式を、しばしば逆行するかとみえる戴學の實態は、その多讀博學に加うるに、それによつて生れる見識を以てして、言語そのものへの興味にとどまることなく、經の言語表現の隅々まで氣を配り、言語の周邊にひろがる筆者の心の波紋を包攝して、古聖賢、すなわち經の筆者、の心を把らえようとする、その讀書の法を觀ることから理解できるのではないか。戴段二王、そして錢大昕らの學の根幹には、この讀書の學がある、と私は考える。從來、あるいは惠氏の漢學と、戴氏の語る圖式とが、「清朝考證學」の表象をつくるに與りすぎていたのではないか。戴震の經學が實は最も文學に近接しているのではないか。

その二、全祖望の「經史答問」、錢大昕の「潛研堂答問」などにおける「問」のほとんどは假設であろう。しかしいま戴震が假設したかもしれないのは、人に與うる書である。もつとも『亭林文集』『潛邱劄記』にみる「友人に與ふる書」のたぐいは、日常の書簡のうち論學の部分のみの鈔出と考えていたが、すでにこれが、實は「書」のかたちを借りた論學の文であつたか。それにしても戴震のそれは、場の設定が具體的であり、小説的ともいえるような、さらなる工夫があることとなる。すると「漢書」馮異傳なども、あるいはすでにみずから知つていた資料であることを伏せて、あえて豫測を記すかたちに作爲した、と考えられなくもない。

その三、本稿は昭和四十六・七・八年度、文部省科學研究費の交付を受け、た總合研究「清朝考證學の總合的研究」（代表者近藤光男）の研究成果の一部である。